

バーンスタインを 愛せなかった日本

病身の天才指揮者に
「カネ返せ」と怒るとは

いわ き ひろ ゆき
岩城宏之
(指揮者)



バーンスタインが亡くなってからというもののやたらに悲しい。指揮する気力を喪失していると言ってもいいくらいだ。

我々の世界では大物の指揮者が死ぬと、「ひとりりいなくなつて、万歳！」というようなところがある。それなのに今回は無性に寂しいのだ。彼とは深いつきあひもなかったし、直接世話になったこともない。それなのに、この寂しさはいったい、何なのだろうか。

バーンスタインはいつも自分のやっていることに無我夢中で、ひとつも秘密がなくて、

た長い第四章が始まった。

終了後、ソニーの盛田(昭夫)さんの家でパーティがあるというので、先に行つて待っていた。ところが、二時間以上待っても来ないのである。

あの人はサインを求められたら絶対に断らない。しかも、小澤君が「レナード・バーンスタイン」というカタカナを教えてしまったから、全部カタカナでサインをするという驚異的なことをやっていたのである。それも六百人のファンに対して――。

遅れてやつと来た、と思つたら「腹すいた、腹すいた」と言つて焼き鳥を山のように食ひ、寿司を何十個もバクバク食つて、いろんなものをガブガブ飲んでワイワイ騒いだ。室内プールがあるからみんなで泳ごうと言つて、沈めっこなんかしてギャーギャー遊んでいた。それから今度はビデオを見て「ワー、ここんとは間違っている」とか「ウン、ここは素晴らしい」とか陽気に騒いでいる。それが自分の指揮を収録したビデオなのである。

それから彼はピアノを弾いた。「ラプソディ・イン・ブルー」だった。自分の「ウェストサイド」を弾き語りしたり、サリヴァンの

駄々子で、ニガ笑いたくなるほどのお山の大将で、そしてすごい天才だった。

初めてバーンスタインに会つたのはニューヨーク・フィルが来日した一九七〇年、大阪フェスティバルホールだった。小澤(征爾)君に連れていってもらつて楽屋に行つたのだが、ミドル級のボクサーみたいなのが、すっ裸でバカでかい白タオルにくるまっていた。怒りで湯気が立っていた。その日の演奏の出来が悪かつたからで、「もうこんな楽団は潰してしまえ! なくなつちまえ! オレはニューヨークに帰る!」と怒鳴りまくっていた。

オペレッタ「ミカド」の歌を歌いだして「これがミュージカルの原点なんだ」とか言つて「幕くらい全部ひとりやって聴かせろ。そして午前五時頃、彼は帰つて行つた。」

その日、彼はニューヨーク・フィルと新日本フィルとのソフトラールの試合に出かけて、応援やら何やらにワイワイ騒いで、午後東京見物をして、夜はマラーの長い長い九番を必死に振つて、六百枚サインして、しかも朝五時まで心底騒いだわけである。そのとき彼は「ああ、彼はスターなのだ」とつくづく思った。どんな場面でも自分が中心で、明るい主役をやつてしまうスターの典型なのだ、と。本番以外にパーティなどには顔を出さない音楽家もいる。例えばカラヤンがそうだった。しかしバーンスタインは、生まれつきの本能的なスターであつたのではないだろうか。

反核の毛糸くず

バーンスタインはやりたいことはみなやつた。指揮はするわ、作曲はするわ、子供たちのための音楽番組に出演するわ、人種差別や社会問題に対しても積極的に参加するわで、

あまりの見舞にぼくたちは挨拶もそこそこ、逃げ出したことを覚えている。

それから数日後、東京でマラーの「交響曲第九番」が演奏された。ぼくは舞台の袖で見ていたのだが、本当にびっくりした。長い第三楽章が終わつたら急にスタスタと戻つてきて、水をガブガブ飲む。お客さんは指揮者がいなくなつたんで「どうしたんだ」ときょとんとしている。マネージャーのほうは心得ていて、さつとタバコに火をつけたりなんかしている。バーンスタインはフウとタバコを吸つてまたスタスタ出て行つて、そしてま

音楽家としての生き方に関しても革命児だつたと思う。

アメリカの税法が変わつて文化のためにならないとなればデモの先頭に立つたし、反核キヤンペーンでは毛糸くずがぼくのところにも送られてきた。全世界の知り合ひの指揮者に毛糸のくずを送つて「×月×日、あなたのオーケストラの団員全員がこの毛糸を腕につけ、全世界のオーケストラが反核の意志を表そう」というのだ。

数年前、ぼくが最初の小説を書いて「話の特集」に載せたとき「指揮者でエッセーを書く人はいないけれど小説を書いた人はいないだろう、ざまあみろ」と威張っていたら、「バーンスタインが書いてるよ」と言われたことがある。その小説の主人公は大変なワイン好きでドケチという指揮者。高いワインを買つては後悔したりするというただそれだけの話。それなのにすくく面白かつた。

彼はやりたいことは何でもやつた。バイセクシャルだったと自分でも言つてゐるし、もしそれが原因で死んだとしても彼の偉大さを傷つけるものでもない。それはプラスでもマイナスでもない、全く関係のないことだ。関心のあることは何でも冒険せずにはいられなか

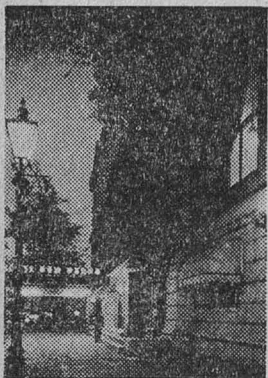
特選宿泊・食事プラン

ときには、二人
大人の休日。
ブルーライト・エポック

BLUE LIGHT
Epoch
お二人様62,000円
(一泊2食、税・サービス料込)

ブルーライト・エポックの特典

- ① 海側デラックス・ツイン宿泊。
 - ② 特選フランス料理のフルコースディナーと、爽やかな朝食。
 - ③ バー・シーガーディアンでのウェルカムドリンク・サービス。
 - ④ ホテル内喫茶無料サービス。
 - ⑤ 大仏次郎記念館(港のみえる丘公園内)入場券プレゼント。
- その他、フルーツバスケット、ワイン、記念撮影等のサービス。



お問い合わせは、

ホテル
ニューグランド
横浜

〒231 横浜市中区山下町10(山下公園前)

045-681-1841(代)

勢いでいろんな人に電話をかけたらしい。あんな人と長話をして、一度切ったのにまたその人にかけて「バーンスタインはスーパースターだったけど、あの人の本当の良さを分かっていたのはどれだけの人のか」と言っているのは随分絡んだらしい。

というのもNHKが放送した「バシフィック・ミュージック・フェスティバル」の数日後に行なわれた演奏会での出来事が頭にあってからである。

七月十日、バーンスタインは東京・赤坂のサントリーホールでロンドン交響楽団を指揮していた。そのときに予定されていたプログラムの三曲のうち一曲を若い大植英次君という日本人に振らせたのである。そうしたらお客が怒った。「予告と違う。カネ返せ」と主催者側に詰め寄ったというニュースを聞いた

時、日本ってなんて貧しい、いやな国なのだろう、とそう思った。

一九六一年バーンスタインが当時アシスタントだった小澤君を日本に連れて来た。彼と一緒にステージに出て「みなさんの国の素晴らしい才能を聞いて下さい」と挨拶した。確か黛敏敏さんの「饗宴」を指揮したと思うが、それが小澤君のいわばデビューだった。ところが今回はアナウンスで「おまじい」と言っただけらしく、お客さんに聞こえないどころか評論家たちまでにも分からなかった、と聞く。そこに突然、大植君が出て来たのでお客が怒った。

バーンスタインは日本でデビューさせてやろうという彼の一流の好意だったと思うが、大植君にとっても不幸なデビューになってしまった。

主催者というのは、指揮者の体調などどうでもよくてその晩さえ振ってくれればいいという残酷なものだ。バーンスタインの体調を考えてその日の音楽会を中止して、「カネ返せ」などという恥かしい騒ぎを起こさないで済むようにできなかったものか、と思う。

バーンスタインが来日公演を途中で切り上げ帰国したのは、こんな騒ぎに嫌気がさした

ったのだとばかりには思える。

その意味でカラヤンはバーンスタインと正反対に位置するタイプの音楽家だった。

カラヤンが西洋音楽の正統の伝統を踏まえれば、バーンスタインは一見、ど素人ではないかと思えるほどの天才だった。自分がこう思ったらこうやるんだという解釈を含めて、自分がそのとき本当にそう思ったことを全部表現してしまった人である。

カラヤンは伝統の頂点を極めたが、バーンスタインは破壊しながら自分の方法で世界を征服した革命者である。自己を神格化したのがカラヤンなら、バーンスタインは何もかもさらけ出して、そしてみんなに愛されるスターだった。

バーンスタインの指揮の表現には、多分にウソもあったろう、と思う。ところが彼自身にとっては没頭しているからウソではなくて本物なのだ。カラヤンのほうこそずっとウソなことウソをついていたのかもしれない。

カラヤンの場合、おじいさんが食いづめてギリシャからオーストリアのザルツブルグに出てきた。だから負けず嫌いでどんなことでも一番でなければ気が済まなかった。オース

トリア人でドイツを征服したという点ではヒットラーに似ているところもある。

バーンスタインの場合も父親はアメリカに渡った貧しいユダヤ系のロシア移民だったが、実業界で成功した。二人に共通しているのは指揮者だからむしろ自己顕示欲がものすごく強いことである。カラヤンは帝王ぶりを示すのが好きだったが、バーンスタインはガキ大将そのものだった。そうした彼の明るさ、駄々っ子ぶりをアメリカ的とは言う。しかし、ぼくにはバーンスタインだけがもつ突出した個性としか表現できない。それほどまでに彼には天性の陽気さ、天才のもつ素直さがあつた。

札幌での瀕死の形相

バーンスタインが亡くなった十月十四日の翌日、NHKテレビで追悼の番組を見た。それは今年の六月、札幌で行なわれた「バシフィック・ミュージック・フェスティバル」の録画で日本に残っている唯一のバーンスタインの生演奏のビデオだという。

シューマンの「交響曲第二番」だったが、すさまじい病人の顔で見ていられなかった。

必死に指揮していて、いつものバーンスタインではあるのだが、第一楽章が終わるともうガクーンとしている。呼吸困難ともいえる症状だ。気を取り直して指揮をすると、またバーンスタインだが、終わるとまたガクーンとくる。

見ていてだんだん悲しくなってきた。瀕死の表情が見えられなくてスイッチを切ろうかと思ったが、切れずに最後まで夜中の一時まで見た。無性に悲しくて寂しくて、誰かと話をしたくてたまらなくなった。この齢になると、夜中の一時すぎに叩き起こせる友人は少なくなっているが、酔っ払った

美しい淡路島の自然が
育んだ：
名酒 都美人

伝承
山鹿仕込
都美人酒造株式会社 兵庫県三原町
0799(42)0360



日本名酒会加盟

からだろう、と思っていた。そうしたら十月九日に引退の発表があった。

以前にバーンスタインに会った時はブクブクに太って非常に不健康で年の割には老けたなという印象だった。しかし、最近ヨーロッパのテレビで彼を見たら、随分元氣そうだったので喜んでた。それが引退を発表した五日後に訃報が入ったのである。

作曲家が指揮を始めた

ぼくがバーンスタインを最初に意識したのは、彼の作曲家としての才能だった。昭和三十年代の初期の音楽雑誌かなにかだったと思う。アメリカですごい作曲家が出てきた、というニュースが載っていた。彼の「交響曲第二番『不安の時代』」という作品が話題になっていた。

アメリカにはコーブランドなどの作曲家はいるけれど、我々の生きている時代に活躍するであろう作曲家は知らなかった。それで注目していたら、その作曲家が指揮を始めたという。これはまったくぼくの認識不足なのだ。が、バーンスタインは最初から作曲家であり指揮者でもあったわけなのに、ぼくは優秀な

作曲家が指揮を始めたのだと勝手に思っていた。昔はマーラーもメンデルスゾーンもシュトラウスも作曲家であり指揮者でもあった。

最近では分業化のため、作曲家が指揮しても臨時の指揮者とならざるを得ず、ぼくら指揮者からみると本当のコンダクターではないのである。だから「あ、バーンスタインも指揮を始めたんだな」という認識でしかなかった。

本当はそのときすでに彼はニューヨーク・フィルの指揮者だったわけで、これはぼくが知らなかっただけのことである。

「ウエストサイド・ストーリー」を初めて聴いたのはベギー・葉山さんの家だった。ベギーさんはアメリカに行つてミュージカルに夢中になってしまったのである。「ウエストサイド・ストーリー」の実演をブロードウェイで見えた彼女は朝から夜まで口を開けば「ウエストサイド・ストーリー」の話で何十回とレコードを聴かされた。「ウエストサイド・ストーリー」の作曲があのバーンスタインだったのである。しかもおそろしく高度な作曲技法を使つていてびっくりした。対位法やフーガなどのあらゆる作曲技法といい、音楽的ハーモニーの複雑な使い方がいい、あの曲はびっくりするほど高度なものを盛り込んでい

た立川澄人で、これが日本最初の大掛かりなミュージカルだった。そんなわけで、ぼくは作曲家としてのバーンスタインもずっと尊敬しているのである。

ぼくは昭和三十五年に初めてNHK交響楽団と世界一周の演奏旅行に出た。日本のオーケストラが外国に出たのが初めてなら、その日程もインドに始まり、ほぼ全部の共産圏諸国、西ヨーロッパの主な国全部、最後にニューヨーク、ワシントンという八十日間の大旅行であった。その途中、ベルリンの音楽祭に二晩出演した。バーンスタインは別の会場で指揮していたのだが、ぼくは「あ、あの作曲家、まだ指揮してんのか」などというひどい認識をしていたのである。

記者会見があった。ヨーロッパにしてみれば、日本から史上初めてオーケストラが来た

一九七二年に刊行された「池田満寿夫全版画作品集」は既に幻のカタログ・レゾネとなつていて、このたび、その後の作品を加え、五六年から九〇年の三四年にわたる全作品八九六点をオール・カラーで再編集。資料性・実用性に加え、代表作八〇点を大判の図版で展開。美術愛好家、池田ファンにとっては必携の作品集となるであろう。

池田満寿夫 全版画

執筆 瀨木慎一 粟津則雄 十米倉守

●判型 三三×二五cm カラー九七六点 総一九二頁
上製・クロス装・函入り 定価二八、〇〇〇円税別 ●近日刊

美術出版社

東京都千代田区神田神保町二二六
電話〇三(三四)二二五

わけて、「東洋の国が西洋の音楽を演奏することをどう思うか」というような、我々にとっては愉快でない質問がたくさんあった。そんな記者会見で、一人のカメラマンが「明日、あなたの音楽会と同じ時刻に別の会場でバーンスタインが振りますね。どうもオレはアメ公が嫌いね。あなたの音楽会のほうが我々ドイツ人は喜びますよ」とゴマをすった。

こっちは二十七歳で、アメリカなんて目じやない、といま思うとびっくりするようなことを平気でそのカメラマンに言ったのである。勝手に二十七歳がそう思っていたわけ、それを恥じ入るようになるまで時間はかからなかった。レコードを通じ、演奏を通じて、その行動を通じて、ぼくはバーンスタインの大ファンになっていたからである。

二年前にアムステルダムで国際指揮者講習

る。それでいて、ちゃんと一般受けするメロディもある。

ミュージカルというのはヨーロッパのオペレッタがアメリカに渡つてアメリカナイズされたが、本当の真のアメリカの音楽は「ウエストサイド・ストーリー」で出発した、とぼくは思っている。ベギーさんのおかげで日本中が騒ぐ随分前から「ウエストサイド・ストーリー」に夢中だった。当時ぼくらもミュージカルのとりこになっていた、昭和三十四年に大阪労音で安部公房作「可愛い女」を上演した(作曲・黛敏郎、演出・千田是也、指揮・岩城宏之)。主演がベギー・葉山と亡くなっ

会の先生をやった。ぼくは教えることが嫌いで、指揮は教えるものでも教わるものでもない主張していたのだが、気が変わって初めて先生なるものを引き受けることにした。若い、プロの指揮者が百五十人応募してきた。それを二十人に絞って、ぼくの目の前で振らせて最終的に八人まで落とした。その八人を三週間しごくスケジュールだ。

実際にオランダの国立放送交響楽団を振らせて「ぼくだったらこうする。しかし、まねはするな。君が体を通してやりたいことを、もっと違うことをやってみろ」と朝の九時半から三時半までレッスンする。そのビデオを全部撮って、みんなでとことんディスカッションする。夜は二時間半、レクチャーをする。「指揮とは何か」とか「何のために指揮はあるのか」など、ぼくなり考えを話す。

海の香りの贈りもの



ばんがくのいかり

●お求めは有名百貨店・名店街で

顔は語る 26



12年間に本を9冊出版した教師
宇佐美 寛了
 (本学文学部英文学科卒)

大学卒業後、三年間貿易業務に従事、人材を育てる仕事をしたいと思い、通信教育で教職課程を学ぶ。一九六五年(昭和四十一年)から津市内の私立高田学園の英語教師。子育てに悩む

親、高校生たちを対象に、七八年から執筆を開始。この一言で子供がグンクン伸びる「大逆転の受験術」など、著書は九冊。他、電話相談も二十年近く続けている。

(朝日新聞 平成2年9月24日朝刊より)

個性ある人材、個性ある学風。
南山大学
 〒466 名古屋市昭和区山里町18番地
 TEL(052)832-3111
 テレホンサービス(052)834-6441

おとし、バーンスタインが七十歳になったお祝いの音楽会があった。ヨーロッパ中のこの国のチャネルでもその音楽会を放映していたし、それ以外にもバーンスタインの特集を組んでいた。それで日本に帰ってきたら何もやっていなくて、ぼくは「なんて国だ!」と怒り狂った。それで無理矢理、「題名のない音楽会」でバーンスタイン七十歳を祝

いのとき、小澤君が「ユー・アー・ザ・モー」自分のビデオを見てワイワイ騒いだパーティーのとき、小澤君が「ユー・アー・ザ・モー」

それがバーンスタインとの最後の出会いになってしまった。

は愚作だと思われる作品があるのだが、ウィーン・フィルと演奏したものを聞いたら、これがまた面白い。バーンスタインが振ると「なんてつまらない」と思うものが意義をもってくる。名作になってしまふのだ。きつと、みんなが夢中になっているから面白くなるのだろう。弾く人も聞く人もみな、バーンスタインの発するオーラに刺激されてしまふのである。

う番組を作ってもらった。日本ではバーンスタインはカラヤンより認められていなかったのだろうか。ヨーロッパではあれほどバーンスタインの七十歳を祝ったのに。ヨーロッパではずっと愛されていた、というのがぼくの実感だ。日本ではバーンスタインが「ウェストサイド・ストーリー」を振るからというだけで聞

十年ほど前、ぼくが振るウィーン・フィルの定期演奏会の練習で行ったとき、楽屋でバツリ、彼と会った。久しぶりで「やあ、こんにちば」と言ったら、そのときは奥さんを亡くした後だったと思うが、でかいツブツブの数珠を持っていて、はめたまま力一杯握手するので、ぼくは飛び上がった。尖った数珠の玉で、指の骨が折れるくらい痛かったのである。

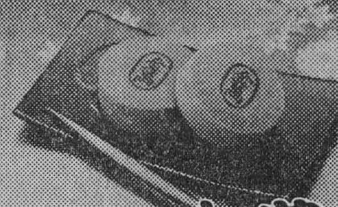
業ではないのである。一九六九年にニューヨーク・フィルをやめ

最高にナチュラな人

て自由の身になってからのバーンスタインは常任といっているほどウィーン・フィルを多く振っている。最初、ウィーン・フィルなんて伝統のかたまりの楽団はバーンスタインと合わないのではないかと思った。実際ウィーン・フィルは最初のうちブラームスでブギウギダンスなんかできるかと言っていた。それなのにバーンスタインのブギウギダンスに夢中になってしまった。夢中になればなるほど良いオーケストラでも音がはずれたりするが、そんなことはそっちのけの迫力が生まれてくる。だが、そればかり続くとオーケストラの機能が低下することがある。バーンスタインはオーケストラを地道に育成するのではなく、消費し尽してしまうようなタイプの指揮者だと思ふ。若い指揮者を育てるのは大好きだったが、一方でニューヨーク・フィルのように出来上がったものは破壊してしまう。ウィーン・フィルは固い伝統と基盤をしっかりと持っている楽団だからバーンスタインがいくら引っ掻き回しても、まだまだドコンビは続いたのではないだろうか。

以下、ぼくの薦めるバーンスタインを挙げてみる。マラーはバーンスタインならとにかく聞くべきだ。マラーはこの人のためにシンフォニーを書いたのだと、思わせるほどのすごさがある。それから、これはぼくの好みだが、バーンスタインのハイドンが好きだ。これが実にはつらつとしていい。彼が自分でピアノを弾いてオーケストラを指揮している「ラプソディ・イン・ブルー」もいい。瀕死の状態で指揮したシューマンも素晴らしい。『合唱幻想曲』というベートーヴェンの中で

変わらぬ味に真心こめて



秋田銘菓 金萬
 金萬本舗 秋田駅前 0188(32)6789